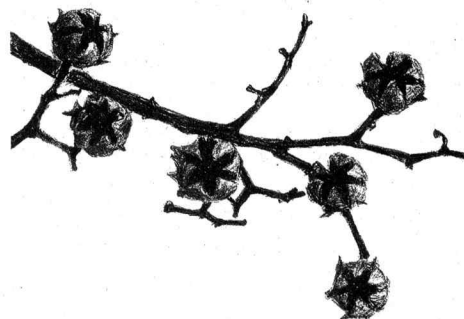


朝日 俳壇



〈サルスベリVII〉 日高理恵子

高野公彦選

震災後のローンがやっと終わったと神戸の喜
 寿の友の電話くる (宇治市) 中西 路子
 紙の本、紙の新聞 アナログの言葉は真っ直
 ぐ心に届く (観音寺市) 篠原 俊則
 ☆悔しくて土俵に「さがり」を叩きつけたいも
 寺尾は輝いていた (甲州市) 麻生 孝
 豊かにはなった暮らした忘れ物を探せり
 小津の映画に (名古屋市) 磯前 睦子
 電飾が日本の夜を無粋にす娘お米と北斎嘆く
 (周南市) 竹中 和之
 戦争を放棄した国 殺傷の兵器を輸出する国
 となる (柏市) 菅谷 修
 リヤカーを引きシクラメン売る農業高校生の
 年末の笑み (安中市) 鬼形 輝雄
 この国の沖縄県を運ぶさま馳るといふ字思
 い出す (水戸市) 中原千絵子
 (こはご)谷中の墓地の屋下がり異国のひと
 のことばが飛び交う (町田市) 山田 道子
 苦勞(96)過ぎ苦難(97)の歳へ入りにけり難聴
 類尿の寂しき元朝 (東京都) 青木 久彌

【評】一首目、苦勞を重ね、大震災から29年後にやっとローンを返済。二首目、私も全く同感です。三首目、亡くなった蘇山親方(もと関協寺尾)の現役時代を讀める歌。十首目、寂しさを言葉遊びで紛らわす。作者97歳。どうかお元気で。

永田和宏選

良いものか悪いものかは切らないとわからない
 いなら我もアボカド (奈良市) 山添 聖子
 ☆悔しくて土俵に「さがり」を叩きつけたいも
 寺尾は輝いていた (甲州市) 麻生 孝
 堂々とこれ程までの民意無視沖縄以外で出来
 ただろわか (千葉市) 鈴木 一成
 死の苦痛和らげるだけ病院は鎮静剤のみみか
 の子どもに (筑紫野市) 二宮 正博
 博物館に保存し皆で眺めたい派閥開催パーテ
 イ券を (館山市) 川名 房吉
 開館と同時に自習室へ行く受験の生徒の大き
 なマスク (札幌市) 藤林 正則
 美しいト音記号を描く彼の少しねじれた恋す
 るきもち (松阪市) こやまはつみ
 母残し車窓に加古川見ゆる傾春の夕べを雪降
 りはしむ (横浜市) 井上 優子
 江戸の蘭歴史の中に消えてゆく小塚原刑場誰
 も知らない (市川市) 北川 利明
 糞はあ梅干ばはあ鬼ばはあそんなばあが
 昭和にはいた (大和市) 水口 伸生

【評】山添さん、このところの歌を讀み、皆心配している。結句アボカドへの着地に驚く。麻生さん、感情がそのまま表れた寺尾は確かに輝いていた。鈴木さん、辺野古埋め立ての代執行。確かにこれほどの民意無視は他の県ではありえないだろう。

馬場のき子選

サンタさんに蜥蜴(トカゲ)なだりし少年は獣医めざし
 て今受験生 (東京都) 唐木よし子
 ヤドリギを採ってもらって口にせし遠き思
 出山仕事の日 (亀岡市) 俣野 右内
 駅伝の先導をする白バイのバックミラーを見
 る眼鏡 (三鷹市) 宮野隆一郎
 阿炎が泣く子どものやうに阿炎が泣く師匠寺
 尾に別れを告げて (八尾市) 水野 一也
 貝層に小さな貝のイボキサゴ縄文人も出汁と
 りしよう (松戸市) 猪野 富子
 早春の糸川沿ひの梅園に大道芸の猿はをさな
 し (横浜市) 西田 陽子
 指切りや恋人つなぎにも見える尾を絡め合う
 タツノオトシゴ (松阪市) こやまはつみ
 児童より父母と祖父父母の多くいる小学校のマ
 ラソン大会 (観音寺市) 篠原 俊則
 パティーで裏金つくる政治家と炊き出しを
 待つ人がある冬 (浜松市) 松井 恵
 屋上に小鳥を座えし鷹が来て羽毛飛び散るマ
 ションの庭 (つくば市) 藤原 福雄

【評】幼い日、サンタさんに蜥蜴のプレゼントを願った少年。第一首ではその人がやっぱり獣医になるため受験を頑張っている。すばらしい。第二首のヤドリギ、実は甘味もあり、山などでは実を食することもあったという。珍しい。

佐佐木幸綱選

供出の梵鐘の証拠を写しありもんべ姿の幼き
 叔父と (東根市) 庄司 天明
 231231の領収印欲しくて大晦日のゴン
 ビニへ (ふじみ野市) 片野里名子
 兄妹に会うと長女の顔になる母が毎朝するス
 クワット (さいたま市) 栗田 幸生
 凍える手水道水で温める零下六度の朝の仕仕
 事 (那須烏山市) 栗野 久夫
 猿の猿は舞ひ終へ祝儀よりパンに飛びつく
 正月の寺 (さいたま市) 齋藤 紀子
 手袋を外す所作から演奏の始まっている街角
 ピアノ (南魚沼市) 木村 圭
 古き家扉と窓が外されて解体までの空間保つ
 胴長をはいてわけていけるセリの田に鳥追いの鈴
 がカラカラと鳴る (つくば市) 藤原 福雄
 ダウンの子寸時を惜しみ腕を組み週一に会う
 リハビリ通い (諫早市) 井石 昭子
 産卵場目指して泳ぐ鮭の群れ懸かれたような
 目つき顔つき (江別市) 長橋 敦

【評】第一首、太平洋戦争の末期に供出した梵鐘と叔父の写真である。今では知る人も少なくなった「もんべ」。第二首、なるほど、数字好きの人には(二〇)二三年一二月三十一日は、希有な日付なのだ。第三首、「長女の顔になる」がうまい。

俳句時評 風土のふくらみ

阪西 敦子

地に根差した俳人が描く風土は、旅で訪れるのとは違う視座を与えてくれる。2023年12月刊行の第1句集「題のうら」(北辰社)で、一章を費やして森羽久衣が描いたのは、ふるさとで、今も母を訪ねてしばしば帰省する石川県。能登の風土だ。《累代の石載せられて茎の桶》では、その昔から漬けられてきたものの上に乗った石を描き、「累代」といつからとは知れぬ時の積み重なりを表す。《ふるさとこの座敷広びる咳ひとつ》では、広く構えた昔ながらの座敷に、冬の空気が張りつめる。同時期刊行の浅川芳直の第1句集「夜の奥」(東京四季出版)。浅川は宮城県名取市に生まれ、東北にゆかりのある若手俳人による同人誌「むじな」の刊行も行う。《田は蘭に沈み一軒の灯涼し》では、その地の田の広さや家の少なさを、蟻の道水平線の迫りくるでは、遮るものない陸と海が、蟻という小さなものの側からスリリングに描かれる。

やはり同時期に刊行された桐山太志の第1句集「耳梨」(ふらんす堂)は、拠点とする奈良の大和と三山のひとと耳成山の古い表記から名づけられた。《饅頭仕掛て風呂を熱うせり》では暮らしを守つて心を鎮め、《鯉濃や風突つかかる窓に雪》《老鹿の黒光りせる初時雨》では、特別なものとしてではなく日常に溶け込んだ鯉濃、鹿を描き、この地での生活のありようが淡々と知らされる。風土を描くこと、それは季節や句の世界にふくらみを与え、また見ぬ地への想像力を読者に与えてくれる。(俳人)

正岡豊歌集「白い箱」 「四月の魚」刊行後、33年ぶりに出した第2歌集。「韻律がぼくを忘れた夕暮れにきみはわらびもちぶらさげてくる」(現代短歌社・2970円)
 栞野浩一・pha・佐藤文香編著「おやすみ短歌」 「三人がえらんで書いた安眠へさそってくれる百人一首」という副題の通り、百首を鑑賞文とともに紹介。(実生社・2750円)

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のほか1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。